真剣でオレと野球しよう

kurosuke7

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真剣でオレと野球しよう

【Ｎコード】
Ｎ０１８７Ｘ

【作者名】
ｋｕｒｏｓｕｋｅ７

【あらすじ】
真剣で私に恋しなさいのオリジナル作品
九鬼英雄にもし、親友・でキャッチャーがいたらどういう人生に・・・
・
オリキャラは、主人公のみです。
原作の設定をそのまま使います。
恋愛は、ちょっとだけ入れます。
シリアスにはなりたくないので・・・
『まじこいＳ』が出ても支障がないように原作キャラは、ある程度

しか出ません。
風間ファミリー＋源及びＳクラスの一部と一年の数名は出ます。
駄文になえうかもしれませんがが頑張って行きたいと思います。
序盤を少し書き直しています。

Prologue

河川敷にある小さなグラウンド、2人の小学生くらいの少年がキャッチボールをしていた。

『次は右打者のインコース低めにカーブだ』

「よかろう」

キャッチャーミットを付けた少年が言い、座るともう一人の少年が大きく振りかぶりオーバースローで投げ込む。

（バシン！）

『ナイスボール！！』

綺麗だがどこか荒々しいフォームで投げ込まれたカーブは、キャッチャーをしている少年のミットにキッチリと収まった。

『そういえば英雄は、どこのチームに入りたいんだ？』

「愚問だな、我が求めるチームはただ一つ、ジャイアンツだ！」

英雄と呼ばれた少年は、意気揚々と答える

「影人、貴様はどうなのだ？」

『オレ？そうだな～、七浜ベイスターズがいいかな？地元だし』

「七浜だと！？影人！貴様は、我のキャッチャーであろうが！何故七浜ベイスターズなのだ！？」

英雄は、怒声を飛ばしながら見た目からは想像できない球を投げ込む

（バシ！）

『相変わらずいい球投げるな～』

キャッチャーをしている影人と呼ばれた少年は、軽くその球を取り英雄の胸へ正確に投げ返す

「そんなことよりも理由を話さぬか！」

『そんな怒るなよ・・・オレは、英雄のキャッチャーでずっと居たい』

「では、何故だ！？」

『逆も然りだよ、オレは英雄と対戦したい。甲子園は一緒に行きたい、でも英雄とプロでライバルになって、ゆくゆくは、世界を相手に戦うのがオレの夢だ』

少し照れくさそうに、だけど笑顔で影人は答える

「ふはははははは！！面白い！！プロになった時は、影人！貴様が我と同じチームでないことを後悔させてやるわ！！」

『それは、こっちの台詞だよ！！』

まだこの時は、２人の夢は大きく膨らみ、希望に満ちあふれていた

少年たちの夢を打ち砕く悲惨な事件が起きるまでは・・・・

設定＋@

黒姫　影人　（クロヒメ　カゲト）

身長　１７７？　体重　６６？

血液型　ＡＢ型

誕生日　９月６日　乙女座

一人称　オレ

あだ名　クロ　カゲト

好きなもの　野球　焼き鳥　野菜ジュース

嫌いなもの　勉強　テロ　怪我

趣味　野球観戦　睡眠

特技　常に冷静でいること　牛乳一気飲み

尊敬する人　工藤公康（最年長プロ野球選手）
努力する人

好きな漢字　夢

容姿

顔・・・さわやかなイケメンで目が少し細い

髪・・・少し長めで襟足を括って尻尾にしている

その他
英雄とバッテリーを組んでいたが・・・
元々は、川神に住んでいたが両親の仕事の都合で大阪に居た
大阪では野球の名門校に通っていた
性格は飄々としており、サバサバしているが心優しい青年
野球が大好きでプロのスカウトが見に来るほどのプレイヤー
勉強はできないわけではないが、する気がない

源忠勝は、影人と英雄のチームに昔居たことにします。

一球目

ｓｉｄｅ影人

『ここが川神学園か・・・・』

６月上旬、オレは、川神学園に転入することになり川神学園の前に居た

『少し遅刻してしまったな・・・速く職員室に行かないとな』

道に迷って少し遅刻してしまったオレは肩に掛けたバットケースを掛けなおして立派な校門に入ろうとした

（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ）

『うん？』

妙な音に後ろを振り向くと砂煙を立てながら人力車がオレに向かって走ってきていた

「ふはははははは、あずみ！もうすぐチャイムが鳴る！急ぐのだ！」

「了解です！！英雄様ーーーー！！！」

『ぬわぁぁぁ！？』

びっくりしたオレだったが人力車は、猛スピードでオレの横を通り

過ぎていった

『・・・英雄？』

その人力車に乗っていた見覚えのある顔と聞いたことのある名前にオレは首を傾げた

「チャイムが鳴るぞ、そんな所で何をしているのだ？」

『はい？』

凛々しい声に振り向くと美人な女性が立っていた、鞭を持って・・・

『えっと・・・すみません。今日転校してきた黒姫影人といいます。』

「そうか、話は聞いている。私はお前のクラスの担任になる小島梅子だ。」

『そうですか、よろしくお願いします』

「うむ、よろしく。職員室に案内しよう」

『はい』

職員室で学園長と自己紹介と簡単な話と書類についての説明を聞き、小島先生の後に続いて教室に向かう

「時に、黒姫」

『なんですか？』

歩き始めるとすぐに小島先生が話しかけてきた

「去年の甲子園で活躍していたお前が何故この時期に転校してきたんだ？」

『・・・・・』

オレは一度考え下を向いたがすぐに顔を上げて小島先生の方を向いた

『元々居た高校ではもう野球ができないんです。元々こっちに住んでいて、両親が仕事の都合でこちらに戻ってくるのについて来たんです』

「もう野球ができないとはどういうことだ？」

『・・・すぐにニュースになります』

「言いたくないようだな、ちょうど教室に付いた。呼んだら入ってこい」

『わかりました』

騒がしいクラスのようで中から騒ぎ声が聞こえていたがパチンという音で止んだ

『鞭を使ったな』

そんなことを言いながらなんとなく隣の教室を覗いて見る

『さっきのメイド？それに軍服に着物？』

ホームルームはすでに終わったようで静かに授業をしていたが、一部の生徒の格好にオレはまた首を傾げていた

『・・・Sクラス』

どうやら学園長の言っていた特別クラスのようだった

「入ってきなさい」

関心していると自分のクラスから指示があったので少し制服を正してドアを開けた

『黒姫影人です。よろしくお願いします』

オレが自己紹介するとクラスがざわつき始める

「おいあれって」

「確か・・・」

ヒソヒソとそんな話が聞こえると小島先生がまた鞭を打ちつける

「静かに！黒姫のことはあとで聞くように、すでに授業は始まっている！各自すぐに準備するように！黒姫、わからないことがあれば委員長の甘粕に聞くように」

オレが遅刻した所為でよっぽど押していたのか小島先生は言い終わ

るとさっさと出ていった

「では、黒姫君はこの席に座ってください」

そう言われたのでおそらく委員長の甘粕と思われる小さめの同級生に促されたので言われた席に座ると麻呂顔の先生の授業がすぐに始まった

一球目（後書き）

始まりました・・・・

緊張しますね・・・・

駄文かもしれませんが、これからお願いします。

二球目

ｓｉｄｅ英雄

「Ｆ組に転校生が来たそうではないか、どれ、からかってやろうとしよう」

昼休み、食事を終えた我が席で瞑想していると不死川がそのようなことを言っている

「あずみ！」

「なんでしょうか英雄様！」

傍で待機しているあずみを呼び、我は転校生の情報を集めるように指示する

「Ｆ組の転校生ですね、すぐに捜査してまいります。少々お待ちくださいませ！」

そういうとあずみは、教室を出ていった

「英雄？転校生に興味があるのですか？」

近くで談笑していた我の友、葵冬馬がもの珍しそうに話かけてくる

「今朝がた校門の前で見知った顔を見てな、少し確認したいと思ったところだ」

「見知った顔ですか？」

さらに珍しそうに我の顔を覗きこむ、我は興味のある人材の顔しか覚えんから珍しいのであろう

「・・・・我の友人だ、大切な」

「英雄の大切な友人ですか、調べずに会いにいけばいいのではないでしょうか？あなたの大好きな川神さんもＦクラスにはいますし」

冬馬は、いつものように笑みを浮かべながら我に提案してくる

「いや、我は奴と会う資格はない。だからこそ何故この学校に居るのか知りたいのだ」

「・・・・まるで英雄ではないようですね。それほど大事な友人なのですか？」

心底興味があるのか冬馬がいつもと違う目をしながら言う

「・・・・冬馬と同じかそれ以上の大事な友だ」

「それは、少し焼けますね」

「ふはははは、それよりも授業が始まるぞ席に着くがよい」

「ふふっ、そうしますね」

もの分かりのいい友に感謝しながら我はあずみの報告を待った

ｓｉｄｅ影人

「なぁ黒姫！何故ここに居るんだ？」

「そうよ！去年の甲子園に出てた黒姫でしょ！？」

授業が終わり昼休みに入った途端に小休憩の間は、まったく誰も話して来なかったのにバンダナを頭に巻いた男とポニーテールの女の子が話しかけてきた

『転校してきたからだけど？』

意味は、わかっているのだがはぐらかす様に答える

「そう言う意味じゃねぇ、今ここになんでお前が居るんだよ？」

『ハァ・・・・だから言ってるんｄ』

真後ろからの声に振り向きならが答えようとしたが振り向いた瞬間にオレは驚いた

『ゲン？ゲンか？』

少し目付きが悪くなっているがオレの球友の源忠勝、ゲンがそこにいた

「何！？知り合いなのか？」

「たっちゃん知り合いなの！？」

「説明は後だ。クロ、質問に先に答えろ」

クロという呼び名に少し懐かしさを感じたがそれに浸ってるわけにもいかなかった

『ゲンがいるなら話は別だな・・・』

「「「「・・・・」」」」

全員の注目がオレに集中しはじめる

『そうだな、言っておかないとどちらにしてもややこしいことになるな』

オレが話始めようとした時、教室の前にあるＴＶのニュースの端に不祥事発覚の文字が見えた

『あれを見た方が早いな』

全員に促し、クラス全員がＴＶを見る

「次のニュースです。先日、大阪の野球の名門校・ＦＬ学園で不祥事が発覚し、昨年度の甲子園ベスト８が取り消しが高野連の発表で明らかになりました。高野連の発表では、ＦＬ学園の野球部の生徒数名が強姦未遂で逮捕　さらにその他複数の軽犯罪が発覚、ベンチ入りメンバーからも事件に関与した生徒がいるのが分かり、高野連

はＦＬ学園に対し高野連除名の厳しい処置を言い渡しました」
ニュースが次の項目に変わるが誰一人としてオレの方をきちんと見る奴はいなかった
『そういうことだ、別に気にしないで普通に接してくれると助かる』
と言っても気にせずにはいられないだろう
「それで？何でこの学校に転校してきたんだ？」
ゲンだけは特に気にした様子もなく話を続ける
『単純に前のＦＬの校長とここの学園長が知り合いで紹介してもらったんだよ。』
「お前なら七浜高校に行けただろう？」
『まぁ、いいじゃねぇか。それよりもゲン、ここの学校に英雄が居るのか？』
聞かれたゲンは少し眉間にシワを寄せている
『居るんだな？』
「ああ、隣のＳクラスだ」
『やっぱりな、朝に校門の前ですれ違ったんだよ』
ゲンは右手を頭に当てて少しため息をつく

『さて、久しぶりの再会と行こうか』

「オレも付いて行く」

オレとゲンは、教室を出ていく

『視線が痛いぜ』

「当たり前だ」

クラスメートの好奇の視線がとても痛かった

三球目

ｓｉｄｅ英雄

あずみの調べた資料に目を通しながら我は今まで感じたことのない感情を抱いていた

「あずみ！確か転校生の公式戦出場停止期間は一年だったな」

「はい、転校した当日から一年になります。英雄様」

奴からこの一年を奪うわけにはいかない、我はすぐに行動に移すことにした

「今すぐに高野連に我自ら向かうぞ！あずみ！人力車を出せ！」

「かしこまりました英雄様！！」

あずみが人力車を用意しに走る、我は携帯を取り出し九鬼家従者部隊に指示のメールを打つ

「おい、九鬼」

「源か、下がれ、我は見ての通り忙しいのだ」

メールを打っていると後ろから源の声が聞こえた

「見てもわかんねぇよ」

「貴様のような庶民には、わからん問題だ」
我は源の方には顔を向けずに指示の文章を打ち続ける
「はぁ、用があるのはオレじゃねぇ」
「何？」
我はメールを打つ手を止め、源の方に顔を向ける
『よぉ』
「・・・・影人」
『久しぶりだな、英雄』

あの頃と変わらない雰囲気で我の友は、立っていた

ｓｉｄｅ影人

あの後、少し誤解を解いた後、ゲンから英雄がこの学校に居ることを知りＳクラスに来ると英雄が何やら忙しそうにしていた

『ゲンから英雄が居るの聞いてびっくりしたぜ？』
驚いた顔をしている英雄の近くまで歩いて行く
（カチ）
首筋に刀を付けられ行くことはできなかった
「やめろあずみ、我の友だ」
それを聞くとメイドさんは、刀を収めてくれた
『（怖ぇ・・・）改めて久しぶりだな英雄』
オレは、ビビりながらもすぐに取り繕って英雄に向き直る
「あぁ、久しいな我が友よ」
『6年ぶりくらいか？』
「それぐらいになるだろう、また離れることにはなるがな」
『どういう意味だ？』
引っ掛かる言い方をする英雄にオレとゲンが怪訝な顔をしていると
英雄の携帯が鳴る
「我だ・・・わかった。御苦労であった」
電話切った英雄は、メイドと2、3言話すとオレ達の方に向き直る

「今、七浜高校にお前の受け入れを申請したところだ」

『「はぁ！？」』

「三日後には転校できる、公式戦にも出れるように今から高野連に話を付けに行くところだ」

オレは、英雄の言ってることが理解できず頭を掻いた

『で？それでどうなるんだ？』

「お前が野球をするだけだ」

ますます理解できなかった

『いや、オレはここで野球するし』

「何を言ってる貴様！大人しく七浜高校に行け！あそこは甲子園常連校だがお前の実力ならすぐにレギュラーが取れる！」

見た事のない英雄の表情にオレは少し困惑したがすぐに冷静になった

『別に川神の野球部入るし、来年の予選には出れるし』

「何を言ってる貴様！！」

完全に冷静さを失ってる英雄をオレはなだめる

『落ち着け英雄』

「ここの野球部はせいぜい2回戦止まりだ！わかっているのか！？」

「おいクロ、今のこいつに何を言っても仕方がないだけだ」

ゲンの忠告に賛成の意味だ頷く

『英雄、今日の放課後に屋上に来てくれ、忙しいだろうが少し時間をくれ、オレはお前とキチンと話がしたい』

「・・・・・・・・わかった」

少しの沈黙の後、オレ達は英雄に背中を向けて教室を出た

四球目

ｏｕｔｓｉｄｅ

放課後、屋上には影人・英雄・ゲンの３人が居た

『ここは、風が気持ちいいな』

フェンス際に立つ影人が何気なく部活動の声で活気づくグランドを見ながら呟く

「「・・・・」」

英雄は屋上の入り口横の壁にもたれ、ゲンは腕を組んでベンチに座っている

「影人、悪いが我は忙しいが故にそれほど時間は取れぬ」

『わかってる・・・・英雄、オレが言いたいことは一つだけだ』

「なんだ？」

『・・・・オレともう一度、野球しないか？』

ゲンは黙って目を閉じていたが、英雄は驚きの表情を隠せずに居た

ｓｉｄｅ英雄

我は耳を疑った

（『オレともう一度野球しないか？』）

この我がどうしても驚きを隠せずに居た

「貴様ぁぁアア！英雄様がどのようなお気持で野球をお辞めになったか知っていて何を！！」

近くに待機していたあずみの怒声が飛ぶ

「下がれ、あずみ」

「しっ、しかしこの男は英雄さ・・まの・・・」

我は二度は言わんという意味で首を横に振るとあずみは、屋上を出て行った

「我の右肩はもう使い物にはならん」

我の頭の中には、あの忌々しいテロの記憶がよぎる

『・・・・・』

「我がマウンドで投げるのにこの肩はもろ過ぎるのだ、世界中から医者を集めたがもう以前のようには投げれないと言われた。それは貴様も知っていることであろうが！！」

我は感情を抑えきれずに声を荒げていた

『・・・・・』

影人は表情を変えずにまたグランドの方を眺めた

ｏｕｔｓｉｄｅ

『なぁ、英雄。野球は好きか？』

影人は英雄と目線を合わさずに呟くように言った

「何をいきなり言っている」

唐突すぎる質問に英雄も苛立ちを隠せずにいる

『オレは、好きなんだ。あの頃と変わらずに・・・・・』

「ふっ・・・・変わらねぇな」

『笑うことないだろゲン』

「貴様ら、我を馬鹿にしているのか？」

影人とゲンのやり取りに英雄の苛立ちが重なる

『悪い悪い、で好きなのか？』

「・・・・・・」

英雄は無言のまま下を見る

『・・・・いい返事を期待しているよ、オレは野球部に明日から入る』

影人とゲンは英雄を置いて屋上を出ていった

五球目

ｓｉｄｅ影人

早朝、オレは学校に早めに来ていた

『どこにいるんだ？』

お目当ての人物は職員室には居らず、校内をウロウロしていた

『あ、いたいた』

お目当ての人物を見つけ小走りで追いかける

『お久しぶりです、宇佐美さん』

「？・・・黒姫か、久しぶりだな」

ゲンの義父の宇佐美巨人が懐かしにオレを見る

「でかくなったな」

『小学校以来ですからね』

「昨日、忠勝から話は聞いた。しかし驚いたな、お前なら他にどこでも欲しがる高校はあるだろう」

『・・・そうかもしれませんね。でも、前の学校の野球部を直接出場停止にしたのはオレですし・・・ちょっとした罪滅ぼしです』

「罪滅ぼしか・・・詳しいことを聞く気はねぇが、若いのにあまり気負うなよ」

『そうですね・・・』

少し気まずい雰囲気が流れてしまうが宇佐美さんは気にすることなく会話を続ける

「で、オレに何かようがあるんだろ？」

『そうでした、宇佐美さんが野球部の顧問だと小島先生に聞いたんで』

オレはカバンの中から入部届を出して宇佐美さんに渡す

「名前だけだがな、監督は別にいる」

宇佐美さんは入部届けを受け取るとめんどくさそうにポケットに入れる

『今日から練習に参加して大丈夫ですかね？』

「別にいいんじゃないか？今日も確か河川敷でロードワークのはずだ」

『今日も？』

宇佐美さんの話し方にオレは少し頭を傾げる

「野球部は同好会状態だからグランドのしようが規制されている」

『えっと・・・つまり？』

「お前を合わして部員は５名だ」

『・・・・へ？今なんといいましたかね？』

耳が遠くなった気がしたので聞き返す

「だから部員は５名だ。」

『ホンマでっか？』

「何で急に大阪弁になるんだ。間違いなく部員は５名だ」

『確か去年は２回戦で・・・・』

「あぁ、去年は１０人居たが今年の残った部員は４名だ」

果てしなく気が遠くなった

「元々この学校は武家の奴が多いから武道の方が活発なんだよ、武道以外で活発なのは陸上とラグビーぐらいだ」

『野球ってどの学校でも人気じゃないですか？』

「この学校は普通じゃないからな」

ダンダンと気が重くなっていった

『部員集めからか・・・・』

「ま、頑張れや」

ポンと肩を叩き、宇佐美さんはスタスタとどこかに行ってしまった

『はぁ・・・ちょっと後悔』

少しこの学校に来たことに後悔しながらオレは教室に向う

『とりあえずゲンに頼むか・・・』

ｓｉｄｅ忠勝

『オレと野球しねぇか？』

先に登校してきていたクロがオレに向かって言った第一声だ

「何言ってやがる、オレは中学で野球はやめたんだ」

オレは中学2年の時に野球をやめている、受験の所為もあったが親父の代行センターの仕事をつぐために代行の仕事を始めたのが大きい

『・・・なんでや？』

「急に大阪弁になるんじゃねぇよ、代行センター継ぐためだ」

他にもいろいろと理由はあるのだが特に言う必要もねぇだろう

『そっか・・・でも毎日バットは振ってるんだな』

「なっ！？」

こいつ、なんで知ってやがるんだ？親父に聞いたのか？

『筋肉トレはきちんとこなしてるみたいだな、ランニングが足りてなくて体のバランスが少し悪いぞ。手の豆は振った時に微妙に感覚がずれることもあるからキチンとケアしろよ』

こいつの観察力は昔からすごい、こいつの分析のお陰で少年野球で弱小チームだったオレ達が全国まであと一歩の所まで来た

『まぁ、お前が野球をまだ好きでよかったよ。≪野球は楽しむもんだ≫、またグランドに来いよ。グランドに来たら全力でやらせるけどな』

≪野球は楽しむものだ≫、こいつは本当に変わっていない。こいつの野球に対して常に真剣だがいつも楽しそうだ、九鬼が強豪チームを蹴ってウチのチームにこいつ目当てで入るのがよくわかるほどこいつと野球するのが楽しかった。

・・・・・だけどな

「トレーニングは、ただの日課だ。野球部に入るつもりはねぇ」

もうオレは野球ができる環境にいない

『・・・残念だな。お前ともう一度野球ができると思ったんだがな』

こっちのセリフだ・・・・

野球バカが・・・・

六球目（前書き）

展開おそいですね・・・
読み直したら書き直したくなって・・・・
頑張って更新いきましょう

六球目

ｓｉｄｅ影人

『はぁ～』

ゲンに断わられてから何人か勧誘してみたがいい返事は貰えそうになかった

『野球ってマイナーなスポーツだっけ？』

Ｆ組の面子に話しかけると逆に質問攻め、Ｓ組に向かってみると邪険にされ、他のチームでも嫌な視線が飛び交うのみで仕方なく野球部が練習してるという河川敷に向かう

（チリンチリン）

後ろから自転車の音がしたので少し右にずれて通路を広げる

『ゲンと英雄、野球部入ってくれないかな・・・』

川を見ながら呟くが・・・最近、寂しいのか独り言が多くなった気がした

「あれ？今のって？」

（ガチャン）

『ん？』

自転車が音を立てて止まったのでそちらを向きなおす

「く、くくく、くく、く」

『く？』

目の前には川神学園の制服を着たかわいらしい女子生徒が居た

「黒姫影人！？」

（ガチャーーーン）

指をオレに向けながら何故かオレの名前を叫んだ、そして自転車は倒れた

「ど、ど、どうしてここに！？しかも川神学園の制服を着て！？」

『いや、転校してきたからだけど・・・』

「なんでなんで！？」

我を忘れているのか動揺しているのかおそらくどちらもだろうが、ずっとオレを指さしながらなんでを連呼している

『取り合えず落ち着いてくれる？はい、深呼吸』

「ヒッヒッフー、ヒッヒッフー」

『ここが大阪ならツッコミの嵐だよ』

何故かラマーズだったが何度かして少し落ち着いたようだ

「すみません取り乱して、私1年C組の大和田伊代です」

『別にいいよ、オレは2年F組の黒姫影人』

「去年の甲子園見てました。私、先輩のプレーを見て感動したんです！！」

興奮しながらオレの手を握ってくる

『・・・手／／／』

「あっ！ごめんなさい。興奮しちゃって／／／」

握られたオレがすごい恥ずかしいかった／／／

「私、去年の先輩のプレーを見てすごく感動して／／／先輩の守備は最高でした！」

意外にも目立ちやすいバッティングよりも守備を褒められた

『ありがとう、キャッチャーって目立たないからそんな事は初めて言われたよ』

「本当ですか！？常にピッチャーを気にかけて、細かい所まで指示を出して危険なキャッチャーフライにも果敢に飛び込んですごい魅力的だと思いますよ」

女の子に珍しく野球のファンのようだ、しかも結構しっかりと見れている。マネージャーとかやっていたのかな？

「一つ聞いていいですか？」

『何？』

大和田さんは、少し緊張気味にもじもじしながら言った

「希望の球団ってありますか！？」

『・・・・へ？』

「将来入りたい球団です！」

『あ、あぁ、あるよ』

「どこですか！？って、ちょっと待ってください。スーハースーハー、どうぞ！」

何故か大和田さん一人慌てて、さらに深呼吸をして目をつぶってまるで告白の返事を待っているようで素直にかわいいと感じた

『七浜ベイスターズだけど』

「い、い」

『胃？』

「イヤッッッターーーーーーーーーーー」

大絶叫、そして

（バターン）

倒れた

『何で倒れてんの？どうすればいいの？えっ？ボケか？なんでやねん！ってちゃうわ』

倒れている大和田さんは何故か幸せそうな顔をしている

『・・・・取り合えず運ぶか・・・・マウンテンバイクで中国雑技団！』

オレは自転車を起こし、大和田さんを背負って荷物を肩に掛けて曲芸走行をし、しょうもない小ネタを挟んで野球部のいるはずの河川敷にむかった

六球目（後書き）

いつになったら野球をするのでしょうか・・・・

七球目

ｓｉｄｅ影人

『こんにちは～』

河川敷を自転車で漕いで5分ぐらいで川神学園と書かれたユニホームを着た野球部を発見することができた

「・・・・黒姫・・」

「黒姫ってだれだ？」

「去年の甲子園、大阪代表ＦＬ学園の黒姫だよ。」

我ながら結構有名人なんだなとこの数日間で実感していた

自転車を適当に立てかけ、大和田さんは担いだまま階段で野球部がいるところまで下って行く

「黒姫くんやね、先生から話は聞いてるけ、ワシが2年で主将の淡島藤五郎じゃ。タメじゃから気楽にいこうや」

『よろしく』

ひとまず大和田さんをベンチに寝かせて主将の握手に応じる

『投手か？』

「ようわかったの、何でわかったんじゃ？」

『指先の豆と爪の手入れの仕方でわかる』

淡島は、ひょろくてノッポでとても野球選手に見えないがどこか不思議な空気も感じた

「ほんで右のヤンキーが難波　泉、真中の小っこいのが徳川　春、その横の暗いのが伏見　銀じゃ。3人とも2年で3年はおらん、そんで1年もおらん。」

『よろしく』

「ふん」

「うん！」

「・・・よろしく」

三者三様の返事が返ってくる

『本当にオレを合わして5人なんだな』

「なに、助っ人を入れれば練習試合くらいは組める。黒姫くんも練習試合やってら出れる。それに本チャン（甲子園予選）は、来年じゃ」

『それもそうだな』

淡島はオレと同じような匂いがした

「それよりもじゃ」

『？』

「何で女子を担いで来るんじゃ！羨ましいぞ！」

淡島が何故か絶叫した

『いや、なんでか倒れたんだよ』

「・・・・大和田伊予」

『知ってるのか？』

伏見が暗い声で言うので聞き返す

「・・・・同じ中学・・・・・野球部のマネージャーだった」

『あ、そうだったんだ』

だから見る所が違うかったんだなと少し納得する

「羨ましいの～・・・・それは置いとくとして、いきなりで悪いんじゃけど明後日の日曜日に練習試合するんじゃ」

『いきなりだな？』

「黒姫くんのタイミングが悪かっただけやろ」

『でも、一緒に練習してないのにいきなり試合は・・・』

「しょうがねぇだろうが、試合しなきゃ練習の成果が見れねぇだろうが！」

「そうだそうだ！」

「こいつは何でもキレるからほっといてくれ、黒姫くんも出て貰うから準備しといて」

キレる難波と茶化す徳川の頭を押さえつけながら淡島が言う

『だったら何球かだけでもキャッチボールを』

「お前なんかにキャッチャーさせるかよ！」

「お前黙っとれ、こいつにキャッチャーさせるから他で出て貰うよ。助っ人のメンバーがどこ守れるかわからんし、急によくわからんチームのキャッチャーも嫌やろ？」

確かにそれもそうだと納得するそれに、転校早々にすぐ試合とは少し不安で無茶振りだが手っ取り早く実力を見ることもできるか

『わかった、』

「もう暗くなってるしな、その子黒姫くんが送ったって。」

『でも、会ったばっかりで・・・』

「・・・・ここ」

伏見がいつの間にか地図を作成してオレに渡してくる

『・・・・ありがとう』

「・・・・・うん」

「ヒゲ顧問に場所と時間、言うとくから聞いといて」

淡島の声に頷いてオレはまたマウンテンバイクで中国雑技団をするべく階段を上がった

「さて、ワシらはあと一人の助っ人探しやな」

「見つかんのか？」

「・・・・無理だと思う」

「取り合えず探しに行こう！」

オリキャラ紹介（前書き）

後々増えるかも・・・・です

オリキャラ紹介

淡島　藤五郎　（アワシマ　トウゴロウ）

身長１９３ｃｍ　体重７８ｋｇ

投手・一塁手

一人称　ワシ　オレ

あだ名　主将　キャプテン　ゴロ

好きなもの　グラビア雑誌　タマネギ　ギャンブル　女の子

嫌いなもの　お堅い人　面白くないこと

趣味　お笑い鑑賞

特技　折り紙

尊敬する人　三浦マイルド（笑）

容姿

髪・・・天パでクロ

顔・・・ビン底眼鏡で取っても普通、角度によっては・・・・

難波　泉　（ナンバ　イズミ）

外野手・捕手・三塁手

身長１７６ｃｍ　体重６３ｋｇ

一人称　オレ

あだ名　イズミ

好きなもの　バイク　喧嘩　Ｋ－１

嫌いなもの　気に食わない奴　喧嘩

趣味　ツーリング　喧嘩

尊敬する人　淡島　藤五郎

容姿

髪・・・・短髪で金髪

顔・・・・釣り目で眉間に常にシワガ寄っている中の上

徳川　春　（トクガワ　ハル）

二塁手

身長１６０ｃｍ　体重４７ｋｇ

一人称　僕

あだ名　ハル

好きなもの　友達　カスタード　金平糖

嫌いなもの　ピーマン　チビと言われること

趣味　甘い物めぐり

尊敬する人　赤星（元タイガース）仁志（元ベイスターズ）

容姿

髪・・・・茶色かかった短髪

顔・・・・どう見ても童顔

伏見　銀　（フシミ　ギン）

身長１６３ｃｍ　体重５０ｋｇ

外野手

一人称　ボク

あだ名　ギン　根暗

好きなもの　部屋の隅　深夜番組　怪談

嫌いなもの　お肉　いじめ

趣味　深夜番組鑑賞

容姿

髪・・・・前髪を６；４で目をあまり見せなくて少し長めの銀

顔・・・・かわいらしいが暗い

オリキャラ紹介（後書き）

とりあえず、野球部の面子です

八球目

ｓｉｄｅ忠勝

日曜日、書類の整理をしに事務所に来ていた

（プルプルプル）

「はい、宇佐美代行センターです」

依頼用の電話が鳴るが特に気にも止めずに書類整理を続ける

「忠勝君、ちょっと依頼が来たから行ってくれる？明細ここにおくわね」

事務の坂東さんに言われてまだ途中の書類を適当に棚に入れて明細を見に行く

「・・・・野球の試合の代行」

「そ、指名ありで電話かかって来たのよ。珍しいわよね」

「依頼人は・・・・淡島藤五郎・・・・・」

見たことのある名前だが特に気にすることはないな

「場所は隼高校のグランドよ、昼の２時から始まるそうだから」

「わかりました」

昼の一時だと今から3時間後か、だったら一度帰って野球道具を取ってくるか

「あら？もう行くの？」

「野球道具取ってから行きます。今日は直帰なんで終わったらすぐに帰ります」

「は～い？」

いい年こいてハートはキツイな

とりあえずオレは島津寮へと向かった

ｓｉｄｅ伊予

昨日は大変だった・・・・

まさか黒姫影人が七浜ベイスターズ希望だなんて・・・・

しかも気絶して送ってもらったなんて・・・・

お母さんに聞いただけで覚えてないけど・・・・

「これはなんとしてもベイにドラフト会議で1位で取って貰わないと！」

「ひっ?!どどどうしたんですか?伊予ちゃん」

「あっ、ごめんまゆっち。なんでもないの」

まゆっちとファミレスに来てたんだ・・・また熱く一人の世界に入ってた・・・・黒姫先輩かっこよかったな〜

「伊予ちゃん、顔真っ赤ですよ?」

「えっ／／／／」

「それで、今日は黒姫先輩の試合を見に行くんですよね?」

「へっ?あっ、うん／／／／」

私が気絶している間に黒姫先輩からお母さんが今日の試合のことを聞いたらしい、お礼を言わなきゃいけないのもあって、まっゆちを誘って見に行くことにしたんだった

「どうしたんですか伊予ちゃん?具合でも悪いんですか?」

「へっ?違う違う、なんでもないよ。あっ!もうそろそそ時間だし行こっか」

なんだか恥ずかしくて強引に領収書を取って私はレジに向かった

ｓｉｄｅ英雄

「英雄様、もうそろそろお昼にされてはいかがでしょうか？」

あずみに言われて時計を見るとすでに１２時を過ぎていた

「時が過ぎるのは早いな、あずみ！すぐに昼食を用意しろ！」

「かしこまりました！」

あずみが部屋を出ていくのを見てから我は自室から見える七浜スタジアムを見る

「・・・・・」

「英雄様？」

すでに用意ができたのかあずみがいつの間にか来ていた

「あずみ、午後のスケジュールはどうなっている」

我は食事の席に付きながら言う

「午後は、今の書類整理が終わると夜の８時の会食までは開いております」

食事に手を付けながら書類整理が終わった後のことを考える

「あずみ、影人の様子はどうなっている」

「・・・・特に情報は入っていませんが、今日の午後2時から隼高校で練習試合が行われるようです」

「練習試合か・・・・」

我はその後は何も言わずに黙々と食事を楽しんだ

ｓｉｄｅ影人

『行ってきま～す』

１１時、軽めの昼食を済ませて家を出る

「おっ、来たな」

１１時３０分の集合に合わせてきたがすでに他の４人は集合場所に来ていた

「おせぇんだよ！」

「悪い悪い」

「大丈夫、問題ないよ。泉が勝手にキレてるだけだから」

ご機嫌な様子で言う徳川に難波はまたキレていた

「ほんじゃま、行くとしますか」

『でも5人だぞ？』

「大丈夫じゃ、助っ人は現地集合になっとる」

ヒラヒラと手を振りながら淡島がスタスタと歩くのに付いて行く

「ま、気楽にいこうや。野球は楽しむもんじゃ」

『・・・・そうだな』

八球目（後書き）

次からいよいよ野球が始まる！？
なんか本当に展開が遅い気がします。

九球目

ｓｉｄｅ影人

「今日はよろしくお願いします」

「こちらこそ」

「部員不足で大変ですね」

「はい、御無理を言ってすみません」

向こうで淡島と隼高校の監督が握手をしているのを見ながら残りの面子は着替えをする

『へ～、じゃあ1年でキャプテンなんだ』

「はい」

淡島の言っていた助っ人とは、七浜にある高校の湘迅高校だった
湘迅高校も部員不足で今年の予選は川神学園と連合で参加するらしい

『でも、合わしても8人となると厳しいな』

「ウチは、全員1年ですから今年の予選は出場しないかもしれませんね」

『そっか・・・・どこでも問題はあるんだな』

「そんなことはどうでもいい！どっちにしろ一人足りねぇんだよ！」
怒り心頭（もう慣れたが）の難波の言う通り、オレ達はまだ≪８人≫なのだ
野球は９人でするものであり一人足りないのだ
「それは助っ人頼んであるから大丈夫じゃ」
挨拶が終わったのか帰って来た淡島が言う
『助っ人？』
「さっき代行センターに野球上手い奴を頼んどいた」
『・・・代行センターね、まさかな』
「宇佐美代行センターです」
『・・・・そのまさかだったとは』
ベストなタイミングで現れたのは源忠勝、ゲンだった
「・・・・はぁ」
『いや～、偶然って怖いなゲン』
オレはおそらくニヤけきった顔でゲンの肩を叩く
「来るんじゃなかった」

「金はきっちり払っとるからしっかり働いてや」
淡島がとても悪そうな顔をしながらゲンの肩をポンポンと叩く
「うるせぇ、わかってる」
「うるせぇとは何だこら！！」
少しゲンと難波のキャラが被ってる気がした
「てかこいつ本当に野球できるのか！？」
「ったくうるせぇ奴だ」
『まぁまぁ、楽しんで行こうぜ？』
イライラしているゲンをなだめてると全員の着替えが終わったようだ
「さて、あと1時間もないしスターティングメンバー発表だ」
『・・・・・』
「早く言えやこらぁぁ！！」
淡島がポケットからメンバー表を取り出したので全員が円になって
囲む

1番、キャッチャー　難波（川神）
2番、セカンド　徳川（川神）

3番、サード　田辺（湘迅）
4番、ファースト　黒姫（川神）
5番、ショート　源　（宇佐美代行センター）
6番、ライト　田中（湘迅）
7番、ピッチャー　淡島（川神）
8番、センター　山野（湘迅）
9番、レフト　伏見（川神）

「じゃあ、今日はこれで行くぞ？」

特に異論はないので全員が頷く

「で、先に言っておくが相手のほとんどは2軍だ」

「なんだこら！！なめとんか！！」

難波はキレているが妥当と言えば妥当だろう
まったくの無名な高校でさらに半分寄せ集めとくればそこそこ強いレベルの高校なら一軍を出したりしないだろう、出てきて選手の調整のためだろう

「で、相手の鼻を折ってやろうと思うんじゃが？」

「へし折ってやるよ！！！！！！」

「・・・・うるさい・・・・」

確かにうるさいがオレも少し腹が立っている

「よし、楽しんで、全力で、勝つぞ」

九球目（後書き）

やっと野球が書ける・・・

十球目

「整列！」

審判が右手を挙げて集合を掛ける

「「行くぞ！」」

「「「「「しゃあ！！！」」」」」

選手達はダッシュでホームベース上まで走って行く

「正々堂々、全力プレーでするように！礼！！」

「「「「「「「「「お願いします！！」」」」」『』」」」」

先攻の川神学園が先行でベンチへ、後攻の隼高校のナインは守備位置へと走って行く

ｓｉｄｅ影人

相手ピッチャーが投球練習をするのをベンチからオレは凝視する

『・・・・・』

「なかなか速いな」

淡島は2軍のピッチャーだとは言っていたがゲンの言う通りスピー

ドはなかなかのものだった

『難波！よく見ていけよ！』

「うるせぇ！！」

できるだけピッチャーの球を見たかったがその期待が薄くなった

「ま、あいつは粘り打ちが得意じゃから大丈夫じゃ」

『そうなのか？』

「それよりもお前の彼女来てるぞ？」

『？』

淡島に言われた方を見てみると大和田さんが知らない女の子を連れて一塁側のベンチから少し離れた所に座っていた

『彼女じゃねぇよ、それよりも試合だ』

「へいへい」

「プレイボール！」

審判の手が上がりプレイボールが宣告されるとピッチャーが大きく振りかぶり、右打席に立った難波はバットを寝かせるように構える

（バシン！）

「ストライーク！」

初球はインコース低めのストレートだった

『いいピッチャーだ』

お手本のようなオーバースローから投げられる投球は丁寧にコントロールされてキャッチャーミットに入って行く

「ストライーク！バッターアウト！」

難波を3球で仕留めた

「最後の球はスライダーか？」

「あぁ、相当コントロールがいいぞ」

3球で三振してしまった難波は少しおとなしかった

『所見であのピッチャーを打つのは難しいな』

その後も2番徳川（右打者）、3番田辺（右）も簡単に三振に取られて一回の攻撃を終えてしまう

「さぁ、しまっていこうぜ！」

淡島の掛け声に続いて守備に就くために全員が走って行く

『セカンド！』

淡島が投球練習をしてる間にボールを転がして守備練習をしようとする

「もういいです」

淡島は一球投げるとすぐにプレイを要求した
それをわかっていたかのように徳川が取ったボールをベンチに転がす

『投球練習いらないのか？』

「苦手なんじゃよ、だからマウンドに上がる前にシコタマ投げてる」

投球練習が苦手の意味がわからないが審判もすぐのプレーの宣告をした

「いくでー」

淡島は大きく振りかぶり、左のオーバースローで球を投げ込む

「ストライーク！」

左打者のアウトコースギリギリに決まり、まずはワンストライクを取る
球自体は１３０ｋｍ／ｈ前半ぐらいだが何故か打者が驚いた顔をしている

２球目はど真ん中に行った

『まずい！』

咄嗟に見える範囲の守備の確認をしたがバッターは空振りして、また驚いた顔をしていた

『あれ？』

「難しく考えないほうがいいよ、キャプテンは詐欺師だから」

徳川が笑いながらオレに言うがよく意味がわからない

「ストライーク！バッターアウトチェンジ！」

その後も淡島の不思議なピッチングで3者三振に打ち取った

『ナイスピッチング』

「どもども、ワシのピッチング見てどうやった？」

『何故打たれないのか不思議だな』

「見てたらすぐにわかるよ、2流どまりの奴には打てんだけやし」

淡島はケラケラと笑いながらベンチにどっかりと座る

「さて、“甲子園の申し子”・“魔術師（マジシャン）”と呼ばれた実力を見せてくださいよ先生」

『そのあだ名、大げさなんだよな・・・・まぁ、頑張るよ』

愛用のバットをバットケースから出し、二、三度振ると左打席に立

った

「君、バットを見してくれるか？」

審判がオレのバットに違和感を感じて見せるように言ってくるがこれもいつものことなので普通に差し出す

「マークはついている・・・・ありがとう」

『いえいえ』

そう言って“ユラユラと普通”に構える

ｓｉｄｅｏｕｔ

～相手ベンチ～

「あれは神主打法か・・・・ん？」

「監督！あの４番の名前、黒姫ってなってますよ！？」

「独特な神主打法、異様に長いバット、黒姫、魔術師か！？」

「ちょっタ・・・」

カキーーーーン

白球は高々と舞い上がり、フェンスを越えていった

悠々と影人がダイヤモンドを一周する

相手選手は打たれて初めて気づいた

黒姫影人
ＸＬ学園、甲子園ベスト４の立役者
夏の甲子園最多安打記録１９本を４試合２０本で塗り替えた男
プロ野球注目の甲子園の申し子
通称“魔術師”

ｓｉｄｅ影人

『てか普通の高校生に魔術師とか大げさすぎなんだよな』

「「「「「「ナイスバッティング！！！」」」」」」

「死ねごら！！」

ダイヤモンドを一周すると仲間達が頭をバチバチと叩き、難波は蹴りを見まいしてくる

「相変わらずだな」

それから逃れるとゲンが声をかけて来る

『野球部に入るか？』

「なんでそうなんだよ、今日だけだ」

『残念だな』

フッとゲンは笑うと右手を上げる

『これも久しぶりだな』

「5年ぶりくらいだからな」

パチン！

「こっから反撃じゃ！！！」

「別に点も取られてないけどね」

『試合は始まったばかりだしな』

十球目（後書き）

野球の表現ってむずかしいですね
頑張って更新しましょう
感想を一通いただきました
感動しました
頑張りましょう

十一球目

「なんでこんなとこにあいつがいんだよ！」

「落ち着け、ただの練習試合だし。他の面子は大したことないんだ」

苛立ちを隠せないピッチャーにキャッチャーがマウンドで落ち着くように説得する

「黒姫は下手に勝負せずに最低ファーボールで歩かせばいい。とにかく低めに丁寧に投げろ。お前のスライダーは簡単に打てやしない」

「・・・・わかったよ」

ピッチャーがそういうとキャッチャーはマウンドを降りていく

「すみません、時間取りました」

キャッチャーは審判と次打者のゲンにそう言うとマスクをかぶって座る

「プレイ！」

審判の声がかかり、ピッチャーとキャッチャーのサイン交換が行われる

ゲンは大きな構えで投球を待つ

サインにピッチャーが頷くと大きく振りかぶりキレのあるストレートを投げ込む

「ボール」

ゲンは悠々と見逃し数回軽く素振りを行う

「ナイスボール！」

キャッチャーはそれを胸元にきっちりと投げ返し、またサイン交換を始める

「打たしていけよー！」

ピッチャーに野手が口々に声をかける

「（次はインローにスライダー）」

ピッチャーは再び頷き大きく振りかぶって投げ込む

キン！

「「サード！！」」

「！」

サード前へのセーフティーバントで少しスタートが遅れたサードが猛然とダッシュする

「取るな！」

「へ！？」

キャッチャーの取るなの指示にサードが驚くが指示通りになんとか見逃す

「・・・・・ファール！」

ボールはファールラインを越えて審判が手を上げる

「っち、狙い過ぎた」

舌打ちをしながらゲンはバットを拾い、右打席にもう一度立つ

「（危なかった、ストレートなら成功していた・・・・もう一度インローにスライダーだ）」

キャッチャーはサインを出すとわざとアウトコースに構える

ビシュッ！

キレのいい球が放たれ抉るようにゲンのインコースに入ってくる

「「（よし！）」」

バッテリーは打ち取ったと確信したが

カキーン！

予想に反して打球はレフトの右を抜けていく

「何！？」

打球は点々と転がって行く

「３つ！！」

キャッチャーは大声を張り上げ３塁への送球を指示するが普通の学校のグランドで長方形なため、レフト側はライト側と違い広いため打球はドンドン転がって行く

「くそっ！」

レフトが打球に追いついた時にはすでにゲンは三塁を回っておりランニングホームランとなった

ｓｉｄｅ影人

『わかってたのか？』

ホームインしてベンチに座ったゲンに聞く

「あぁ、打てないこともないスライダーだったからな」

「わかってた？」

近くに居た徳川が不思議そうに聞いてくる

「ストレートを投げる時よりスライダーの時の方がロージンを付ける量が多い、いいスライダーだがあのレベルなら分かっていたら8割方打てる」

「へぇ～僕わからなかったよ。ありがとう！」

「勘違いすんじゃねぇ、仕事で来たんだ。負けたら目覚めが悪いだろうが」

相変わらずのツンデレのゲンが言っている間に6番の田中は三球三振していた

「あれ？癖は教えてたんだよね？」

「・・・・残りの2割だったんだろ」

ちなみに3球中スライダーは3球だったらしい

『で、次は詐欺師？の登場か』

「詐欺師・淡島か」

『あれ？ゲン知ってるのか？』

「あいつとは中1の新人戦でやっているが、敵に回したくないタイプだ」

ゲンが少し嫌そうに話してるので流して淡島に注目する

淡島がバットを持つとものすごく小さく見える、そしてヒョロイ
左で投げていたが右打席に立つと審判に軽く一礼する

『それにしてもデカイ』

「１９０ぐらいあるな」

淡島はバットを完全に寝かせて方に置き、本当に脱力したように構える

「なめてんじゃねぇー！！！」

そんな構え方に腹を立てたのか相手ピッチャーが叫びながらストレートを投げ込む

キン！

アウトハイの威力のある球だったが軽く出されたバットに当たるとフラフラとセカンドとライトの間にポトリと落ちた

「いや～落ちたな～」

呑気に一塁で淡島が言う

『あいつが詐欺師な理由がわかった気がする』

「・・・・まだ・・・・・・序の口」

伏見がネクストで待ちながらポツリと呟いた

「詐欺師は墨に出てからが強いんだよ」

徳川はニコニコと言う

『ふ～ん、こちらもお手並み拝見』

「任せとけ～」

呟いただけなのに聞こえる地獄耳でもあった

十一球目（後書き）

久々の更新です
プライベートでいろいろあって落ち込み気味ですが
頑張ってこれから更新続けたたいと思います
さぁ、目指せ毎日更新
感想2通目ありがとうございます

十二球目

ｓｉｄｅ影人

「あいつ、何やってやがんだ」

『・・・・』

淡島のリードを見てゲンが頭を掻いているが無理もない、リードが通常の１、５倍ぐらいあり広すぎるのだ

「なめんな！」

バッテリーの判断はもちろん牽制だが

ザザー

普通に帰塁に成功していた

『あの長伸と意外な機敏さがあのリードを可能にしているのか』

「それにキャプテンは癖とか読むの得意だしね！」

何球か牽制されるが淡島は軽く帰塁し、ピッチャーの意識を自分に向けた

『投げにくいだろうな』

「・・・・イヤらしい・・」

刺すことを諦めたのかキャッチャーのサインに頷き、ピッチャーがセットポジションからクイックで投げ込む

「走った！」

それと同時に淡島がスタートを切り、ファーストが叫んだためピッチャーはアウトコースに外すが

「嘘じゃ～」

勢いよくスタートを切っただけで盗塁せずに一塁に戻って居た

『ピッチャーなのにあんだけスタート切って大丈夫かよ』

淡島はその後も何度もスタートを切り集中力がキレたピッチャーはファーボールで歩かせてしまった

「楽にいけよ～銀～」

打席には伏見が立つ

『・・・・騙し合いの野球で勝負か』

「小賢しいが、一番効果のあるプレーだな」

オレとゲンは、少し関心していた

「ホームに返さなければいいんだよー！！！」

完全に頭にキテいるピッチャーが伏見に向かっておもっきり投げ込む

「・・・・速い球・・・・・・好き」

キン！

ミートされた球は一二塁間を鋭い当たりで抜けていく

『これはストップだな』

オレがそう考えたときだった

「バックホーム！！」

キャッチャーの声がグランドに響き渡った

「「「『なっ！？』」」」

ベンチに居たオレ達と相手チームも驚きの淡島のホーム突入だった

『外野前進守備だぞ！？』

伏見の小さい体を見て少し外野が前進している上に鋭い当たり、普通なら止まるべきの暴走だった

「だっ！！」

ライトのバックホームはノーバウンドでキャッチャーミットにストライクで来る

淡島はそのまま突っ込むがタイミングはほぼアウト
だが
「セーフ！！」
審判の判定に全員が驚いた
「ラッキーじゃ」
唖然とするキャッチャーと違い笑いながら淡島が言う
「そんなバカな」
『・・・・やるな』
ヒットエンドランの策、そして確かな走塁技術の勝利だった
「あいつどうやってセーフになったんだ？」
ゲンが不思議そうに言う
『タッチを掻い潜った、そしてキャッチャーの確認不足だな』
二塁でのリード・守備位置・足の速さ・技術、淡島はスタートの素振りだけでそれを全て自分の有利なようにしたのだった
『スタートを連続して切ることによっての相手の苛立ち、ピッチャーが短気だったから余計上手く嵌った。そして、リードが広いと言う認識は牽制するために無意識にセカンドを二塁に近づけて一二塁

間を広げた。足の速さと技術の情報がないのにすぐにピッチャーが投球したのは淡島の思惑通りでストレートが得意だろう伏見に打たれ、それがヒットエンドランというのも知らずにな』

「ほんで、ちょっとした足の交差を利用したタッチの掻い潜りじゃ、素晴らしい観察力じゃな。今度この掻い潜り方教え足るわ」

そう言った淡島はお茶を飲んですぐにブルペンで徳川とキャッチボールを始めた

『・・・・』

「嫌なプレーだ」

ゲンが苦い顔をしながら帽子を深くかぶる

「ストライークバッターアウト!!」

次の難波が三振したようだった

「・・・・・」

さっきよりしょんぼりとしていた

「ストライークバッターアウトチェンジ!」

そして次打者もすぐに三振に終わりチェンジとなった

「さぁ、締まっていこう!」

「「「「『おう！！』」」」」

各自が声を出してポジションに向かっていくが難波はとてもおとなしかった

ｓｉｄｅ？？？

「おっ、やってるね～」

３対０で２回の表、２軍相手とは言え上場の立ち上がりのようだ

「君たちどこの生徒？」

「「はい？」」

近くに座っていた女子高生に話しかける

「川神学園です」

刀を持ったほうじゃない子が答えてくれる

「ちょうどよかった、試合の経過を少し詳しく教えてくれるかな？」

「は、はぁ・・・・あのどちら様ですか？」

少し不審そうな眼で見られた・・・・ポケットに入った名刺を取り出し、女子高生に渡す

「陣内武蔵（ジンナイゲンゾウ）、しがないフリーの記者だよ」

十二球目（後書き）

更新とどまってます
スランプじゃないんですけど、ちょっと忙しくて書けないのと、ストックの紙をなくしたんで書き直し中です
感想頂いたのに拝見が遅くなったりして申し訳ありません
頑張っていきますのでよろしくお願いします
感想ありがとうございます
誤字・意味を訂正させていただきました

十三球目

「ゲーム！」

「「「『ありがとうございました！！』」」」

両チームが審判のコールの後に続いてあいさつをし、近寄ってお互いに握手をする

「負けたが、次はエースになってお前を三振に抑えてやるよ」

『あぁ、また野球しよう』

「完敗です、なめてかかっていました。次は1軍と勝負しましょう」

「その時は、全員川神学園の生徒で全力で挑ましてもらいます」

そしてお互いに健闘をたたえ合った

ｓｉｄｅ英雄

「ふむ・・・・」

試合の観戦に来てはみたがすでに８回表の守備、すぐに試合は終わってしまった。結果は１０対０で川神学園の圧勝だったが隼の投手を見る限りは普通の結果であろう

「あずみ、点数の内訳は」

「こちらです」

あずみの差し出したスコアブックを見る

隼高校　０００００００００　Ｈ２
川神学園　０３３００２２２０　Ｈ１２
本塁打　黒姫２　源１
二塁打　黒姫２　源１　淡島１
盗塁　黒姫２　源１　伏見２　徳川１
難波４三振

「・・・・」

堂々たる成績、我は心底関心をしていた

『見に来てたのか』

ふと気が付くと影人がスポーツドリンクを飲みながら目の前に居た

『いつから来たんだ？』

「ついさっきだ、すでに８回であったがな」

『残念だな、仕事は大丈夫なのか？』

「雑務が思ったより早く終わったのでな、民の様子を見るのも王の使命だ」

『王も大変だな・・・そうだ』

影人は笑いながら言い、ポケットの中から何かを取り出す

『今日のウィニングボールだ、お前にやる。最後ファーストゴロだったからな』

「・・・・・」

「黒姫!!戻って来いや!!」

ベンチの方から怒声が聞こえる

『呼んでるから行くわ、じゃあな』

そう言うと影人は走って行ってしまった

「・・・・英雄様」

「・・・・帰るぞ、あずみ」

「了解です英雄様!!」

side影人

『ごめんごめん』

英雄に会った後、チームメイトのもとに駆け寄るとすでに全員帰る

準備をしていた

「遅せぇんだよ！！」

「はいはい、４三振は黙っててね」

「なんだとこら！？」

難波と徳川の喧嘩を笑いながら見ているとゲンが手招きする

「九鬼か？」

『８回から見てたみたいだ』

「あいつ何か言っていたか？」

『何も・・・気長に待つよ』

「・・・・まぁいい、取り合えずアレを送ってやれ」

「可愛い女の子を待たすのはワシが許さん、さっさと送れ！キャプテン命令じゃ！」

『？』

ｓｉｄｅ伊予

なんだか変な人に声を掛けられたがまゆっちの笑顔で逃げてしまった

「帰ろうか？まゆっち」

「そうですね」

『お～い』

聞き覚えのある声に振りかえると黒姫先輩がこっちに向かって小走りで向かってきていた

「ど、ど、どうしたんですか？」

突然のことに私はドモってしまう

『いや、来てくれてたんだと思って・・・』

「はい、母から聞いていたので／／／／」

ものすごい照れてしまう、さっきまであんなにカッコイイプレーでグランドを走っていた人が目の前にいるのだから

「わ、わ、私、お邪魔みたいですね？！」

「こいつは撤退だまゆっち！」

そう松風と言いあうとまゆっちはすごいスピードで走って行ってしまった

『・・・・？・・何であの子ストラップと話してたの？』

「いや、あ、あはははは」

『？？・・・追いかけなくて大丈夫？』

少し心配そうに黒姫先輩が言ってくる

「いや～、もう追いつけないかな～って」

『そう言えば、そうだね』

黒姫先輩も少し苦笑いして頭を掻く

「（やっぱりカッコイイな／／／／）」

『よし、じゃあ行こうか？』

「へっ？どこにですか？」

『送って行くよ、もうすぐ６時になるしね』

私のドキドキはもう少し続きそうだった

ｓｉｄｅ陣内

試合は１０対０で川神学園の圧勝か

「ネタにできそうにないか・・・でも、黒姫だけでも一面に飾れるが・・・・練習試合じゃな」

メモ帳を見ながらため息をつく

「今回の試合も急すぎてデスクも動かんし、話し聞こうにも怖い顔の女の子居るし・・・・大阪から追っかけてきて失敗だったかな」

スコアブックを見直しながらまた深いため息をついてしまう

「・・・・あれ？」

向こうのほうで黒姫と額にバッテンがついた男が話をしているのが見えた

「あれは・・・・九鬼の長男じゃ・・・・・・」

そしてその後、女子高校生と談笑して、さらに一緒に帰ろうとしているのが見えた

「まだ、天はオレを見離すしてなかった」

オレはすぐに尾行を始めた

十三球目（後書き）

急に野球終わっちゃいました！
野球のネタが書くのがメンドイとかじゃないです。
まだ始まったばかりなんでネタが出しつくしてしまうのが辛い・・・
もっと更新ペースを上げてまた野球のシーンを書きます
応援お願いします
頑張ります

十四球目

ｓｉｄｅ影人

『今日の試合どうだった？』

大和田さんとの帰り道、ずっと黙っているのも嫌だったからこっちから声をかける

「へっ！？あっ、えっと・・・カッコよかったです／／／」

『えっと・・・・ありがとう／／』

何だこの反応は・・・・普通にうれしいな

「本当にすごいですね・・・あれだけの自分のプレーを発揮できる選手ってそういないですよ。本当に七浜ベイスターズに入ってくれると嬉しいな」

『それは向こう次第だよ、オレもまだまだ未熟な選手だしね』

「先輩はすごい選手ですよ！」

『本当に？』

「はい！今日のホームランなんか・・・」

野球の話ならトントンと進むので助かった、女の子と話すのはあまり得意じゃないから

「そう言えば、さっき変なおじさんが先輩の事を聞いてきましたよ」

『変なおじさん？』

「はい、確か・・・陣内・・・・」

陣内さんこんなところまで追いかけて来たのか・・・

『次にその人に会ったら無視してね』

「無視はないんじゃない？姫ちゃん」

後ろからの声に振り向くと陣内さんが立っていた

ｓｉｄｅ伊予

さっき話しかけてきたおじさんの方を向いた先輩はいつものニコニコとした優しい顔からいっきに険しい顔に変わった

「久しぶりだね姫ちゃん、会いたかったよ」

『お久しぶりです陣内さん、会いたくなかったです』

「冷たいな～」

陣内さんは笑いながらカバンからメモ帳を取って開いた

「今日のバッティングについて一言お願いします」

『運がよかったです。ピッチャーが頑張ってくれたんで援護したかったです』

「相変わらずオレには淡々としか答えてくれないね」

『すみません取材は嫌いなんです』

淡々とした口調、二コリともしない顔、今までの先輩のイメージからはかけ離れていた

「ま、いいや。それよりも元大阪代表の高校の不祥事の件に関してなんだけど・・・・」

『ノーコメントでお願いします。それにそのことについてはあなたが一番知っているでしょう?』

「まぁね、ただ“甲子園の申し子”の今の心情が聞きたいんだよ」

『それならただ残念です』

「ふ～ん、記事にできないな～。それで、その子は彼女?」

『一介の高校生に入り込んだ取材しますね?訴えられたいんですか?』

ダンダンと先輩の顔と口調が激しくなっていく・・・・・怖い

「なら彼女に聞くよ『うせろ』おお～怖い怖い」

『消えないならオレらが消えます、では』

そう言うと先輩は私の手を握ってスタスタと歩きだした

ｓｉｄｅ影人

あの声を聞くだけで元の高校の事を思い出してしまう

「せん・・・せ・・・ぱ・・・・・・い・・・！」

せっかく意を決して川神へと戻って来たのにあの男が居るとまた野球ができなくなりそうで・・・・

「せん・・・！せ・・・ぱい・・・・・・・！！」

それが恐ろしくて・・・・ただ野球がしただけなのに・・・・

「先輩！！」

『えっ？』

気が付くと河川敷を外れて住宅街まで来ていた

「大丈夫ですか？」

大和田さんが心配そうに顔を覗いてくる

『えっと・・・うん、大丈夫』

少し困惑したがすぐに取り繕って笑顔で返す

「・・・・あの・・・・・・手／／／」

『手？・・・・あっ！？ごめん！／／／』

いつの間にか大和田さんの手を引っ張っていたようだった、無意識とは怖い

「あの人と何かあったんですか？」

心配そうに大和田さんはオレの顔を見て来るがオレはすぐに首を振る

『なんでもないよ、ただの知り合いだよ』

「・・・・そうですか」

普通に考えれば納得できないだろうが大和田さんは、頷いてくれた

「でも先輩」

『うん？』

「辛かったら言ってくださいね、力になれることがあれば言ってくださいね」

優しく頬笑み掛けてオレの手と握手するように握ってくる

『・・・・ありがとう』

「はい・・・・・・先輩の手大きいですね」

そう言いながらニギニギとオレの手を握ってくる

『えっと／／／／』

「あっ！ごめんなさい！／／／／」

バッっと手を離され少し気まずい空気が流れる

「まめ・・・・」

『まめ？』

「先輩の手、素振りでマメができてるんですね。すっごい努力してるんですね」

『・・・努力』

この子の言っている意味が少し理解するのが遅れた・・・・オレは世間では“天才”らしいから

「去年の甲子園見た時からあれだけのプレーをするのにどんな努力をしたのかなって考えてたんですよ

、そしたら手はマメでいっぱいで固くて・・・・きっとすごい努力をしたんだな～って」

『・・・・人並みにはね』

なんだろうこの気持ちは・・・

「先輩のプレーって本当にすごいですもんね」

なんだろうこの込み上げる物は・・・・

「今度の試合、いつか教えてくださいね」

久しぶり？こんな感覚は・・・・

『うん、また見に来てよ。頑張って活躍するからさ』

「はい！／／／」

分からなくていいや今は・・・・・

気分がいいから・・・・

『速く帰ろうか』

「はい！」

十四球目（後書き）

ちょっと学園祭で忙しくて更新できませんでした

ネタも・・・・

これからもがんばりますので見守ってください

十五球目

ｓｉｄｅ影人

いつもの河川敷の小さなグランド

「ランニング終わりじゃ！5分後にキャッチボール始めるからの！」

ゴロの声に返事をしてベンチに置いてあるスポーツドリンクを飲む、6月といえど嫌な暑さがある

『そう言えばもうすぐ予選か』

「クロはあんまり関係ないけどね！」

この野球部に入ってあの試合から一週間が過ぎたが順調にチームに打ちとけることができた

難波以外はオレのことをクロと呼び、オレは淡島をゴロ、徳川をハル、伏見をギンと呼んでいるが難波だけは難波のままだ

『前に言ってたように湘迅と予選に出るんだろ？合同練習しなくていいのか？』

「湘迅は進学校やから練習時間が極端に短いんじゃ、ワシらみたいに毎日放課後にできるわけでもないしの」

『そうなのか、でも練習はしないとな』

「まぁ、ええわい。本番はクロが出れる来年じゃ、今の戦力じゃ激

戦区神奈川を制するのはまず無理じゃからの。それまでは各々のレベルアップと試合慣れ、部員確保じゃ」

そう言いゴロは飲み物を飲み干すとグローブを手に軽く肩を回し始める

「泉、プロテクター付けて受けてくれや」

『あっ、オレが受けるよ』

オレは自分のプロテクターを取ろうとバッグに手を伸ばす

「その必要はない、クロはバットを持て」

『バット？』

首を傾げながらゴロの方を向く

「バットじゃ、今からワシと1打席勝負じゃ。まぁ、バッティング練習じゃな」

「おいおい！オレをバッティングキャッチャーにする気かよ！」

難波が不満そうな声でゴロを威嚇する

「黒姫がワシのキャッチャーになる前の簡単なテストじゃ、お前もキャッチャーより本来の守備のほうがいいやろが！我慢して座れや！」

「・・・・っち」

舌打ちをしながら難波はホームベースの所でしゃがみ込む

「肩慣らしするさかいちょっと待っといて、ハルとギンの3人でトスでもしといてくれんか」

『わかった』

ハルとギンと一緒に少し離れたところでトスバッティングを始める

『オレを試すピッチャーは初めてだな』

「まぁね、キャプテンもこだわりがあるみたいだしね。昔組んでたキャッチャーといろいろあったみたいだし、難波が今キャッチャーやってる理由なんかキャプテンが自分でサイン出せて“ある程度なら取れる”からだよ」

『ある程度？』

「もうええぞ！！」

15分ぐらいしてゴロから声がかかったのでバッターボックスまで走って行く

「ほんじゃま、行くかいの」

ハルはセカンドベース当たりに付き、ギンはフェイスガードをして審判、難波が座るのを確認するとオレは軽いストレッチをして左のバッターボックスに入る

「勝負は一打席、当たりによってアウトか適当に判断。振り逃げはなしじゃ」

『わかった』

オレは一度精神を集中させるために深く息を吐く

「・・・・いくで」

ゴロが大きく振りかぶり体を軽くヒネリ、鋭い腕の振りで投げ込む

バン！

「・・・ボール」

ボールはアウトハイに外れた

『・・・・ＭＦＢか』

「一球でわかったか、さすがじゃ」

ムービングファストボール、通称ＭＦＢはメジャーリーガーがよく使う球で簡単に言うとストレート版ナックルだ

『コントロールの精度もよさそうだ、狙った所に投げられるのか？』

「右に曲がるか左に曲がるかだけはな、どんなけ曲がるかはその時で違うんじゃ。変化幅が雑すぎて取れるキャッチャーが中学時代はいなくての」

だから無名の学校に居るのかと納得した、いくらすごくても取れな

ければ暴投と変わらない

『・・・・なんで難波は取れるんだ？野手だろ？』

「知らねえよ」

「そのウチわかるわい、それより次行くぞ」

そしてゴロはまた大きく振りかぶる

『・・・・・』

オレは打てる確信を少ししていた、変化幅がすごくても引きつけて曲がりきるを叩けばヒットになるからだ

ヒュッ！

するどい腕の振りから投じられた球はインコース真中にコントロールされていた

『（よし！）』

確実にとらえたと思っていた

ポン

ボールが転々と後ろの小さいフェンスに当たった音がした

『なんだ今の球は・・・・』

マウンドに居るゴロに思わず聞いてしまう

「難波でも取れない魔球じゃ」

『魔球？』

「ワシはこの球を

“バット”

と呼んでるんじゃ、これを打席で見てほしかったんじゃ」

『・・・・バット』

十六球目

ｓｉｄｅ影人

『難波！締まって行けよ！』

「プレイボール！」

甲子園予選神奈川大会一回戦、川神学園・湘迅学園ｖｓ七浜高校の試合が開始された

「先行の川神・湘迅学園の攻撃は１番・キャッチャー難波君」

『てか、今さらだけど一回戦から優勝候補と当たるか？』

「ワシはくじ運が異様に悪いんじゃ」

約一週間前に行われた抽選会でゴロは一回戦の一試合目で七浜高校との対戦を引いた。オレはスコアラーとして登録してもらい制服に帽子でベンチ入りしている

「・・・勝てる・・・気・・・・しない」

『ま、それを勝てばおもしろいけどな』

ピッチャーはおそらく二番手の選手だろう、去年の甲子園で活躍した一年生はベンチで座っているのが見える

『でも、二番手でもいいピッチャーだな』

「普通の高校なら余裕でエースだろうからな」
スピードメーターで１４０ｋｍ／ｈを超えるストレートで投球練習で見たおそらく決め球のフォークは素晴らしい
「クロが出れたら互角ぐらいになるんじゃろうがな」
「キャプテンの魔球を打っちゃうしね」
『たまたまだよ』
「ストライーク！バッターアウト！」
試合が始まったばかりだというのにすでに難波は3球三振でトボトボと戻ってきていた
『力量差か・・・』
味わったことのない感覚だった
打線は確実に劣っている
策を使ったとしてもあまり意味のないこちらの実力
守備力もそこまで高くなく穴もある状況
全力で投げることのできないピッチャー

「それでもやるしかないんじゃ」

そう言いながら三球三振に終わっている打線に文句一つ言うことなくマウンドに上がっていく

「プレイ！」

ｓｉｄｅ陣内

「・・・全然やな」

５回の表で１４対１のスコア、この前の練習試合ではあのＭＦＢは通じる相手だったが絶対に七浜学園に通じるような投球ではない

「淡島・・・なかなかのピッチャーやけど全力で投げられへんのは痛いな、伏見、徳川は見どころがあるが他がしっかりしてないとやはり微妙やな」

「ゲームセット！」

コールドゲームで試合は幕を閉じた

「今年の七浜も盤石の布陣か・・・・来年は頑張ってな姫ちゃん」

ｓｉｄｅ忠勝

「・・・負けたか」

ヒットは3本でなんとか3回に1点を取ってはいるがあとは散々な内容、エラー5にヒット8本で１４失点

「そういやあいつがこんな簡単に負けるのは初めてだな」

七浜高校の校歌をベンチ前で聞くクロの背中を眺める

「・・・・・・」

ｓｉｄｅ英雄

「・・・・・」

我は何故か悔しかった、影人の後姿を見ていると

「九鬼」

「・・・・源か」

声のする方向を見ると源が居た

「負けたな」

「そうであるな、影人なら来年は勝つであろう」

「協力してやらねぇのか？」

「我は忙しい、それに我はもうグランドに立つことはない」

我はグランドの方を向くと影人がこちらを向いていた

「・・・・我は仕事に向かう」

「そうか」

我はグランドに背を向けて出口に向かう

「英雄様・・・・」

ｓｉｄｅ伊予

「負けちゃいましたね」

「・・・・うん」

まゆっちと見に来ては居るけれど川神学園は負けてしまった

「・・・・黒姫先輩、泣いてませんでしたね」

「・・・・・うん」

「・・・・伊予ちゃん、帰りましょうか」

「・・・・うん」

帰り道、まゆっちは気を使ってずっと話しかけてくれてるど私は黒姫先輩のことで頭がいっぱいだった、泣いてはいなかったけど悔しそうな顔・・・・

「まゆっち！」

「はっはい！」

「私決めた！」

「へっ！？」

十七球目

『眠いな～』

首の骨をバキボキとならしながら影人が登校している。時間は登校するには少し早いが野球で勉強する時間を取るのがダルい影人はいつも早めに登校して予習を行っている

「黒姫、あいかわらず早いな」

『おはようございます、宇佐美さん』

校門付近でちょうど早朝の教員会議のために来た宇佐美に会う

「試合は負けたそうだな」

『はい、完敗です』

あっさりと返す影人に宇佐美が少し驚く

「全然悔しそうじゃないな」

『試合を悔やんでも仕方ないですから、あと１０カ月ほどで七浜にリベンジしますよ』

「そうか、まぁ頑張れや。おじさんは応援してるよ・・・・それと、忠勝のことも頼んだ」

そう言うと宇佐美は眠たそうに職員室の方へと向かった

「おはようさん」

影人が2ーFの教室に入るとすると後ろから声がかかった

『ん？あぁ、ゴロかおはよう』

「朝早いな、ワシは眠いわ」

淡島は，眠たそうな目を擦りながら影人の隣までフラフラと歩いてくる

『どうした？何かようか？』

「これからの野球部のことでな」

天然パーマの髪の毛をガシゴシと掻きながらアクビをする

「ワシに変わってキャプテンせぇへんか？」

『は？』

「何じゃ、何言ってんだみたいな顔して」

『そりゃあなるやろ？オレは入部して一カ月やで？』

驚きのあまり大阪弁になっている影人に淡島は続ける

「ワシはピッチャーじゃ、ピッチャーとキャプテンは荷が重いしそれにクロの方がキャプテンに向いてるのは一目瞭然じゃ」

『お前がよくてもみんなが、特に難波は反対するぞ』

「キャプテンの決定事項じゃ」

ノウノウと言う淡島に少し影人が思考する

『・・・・考えとく』

「ええ返事期待しとるわ」

そう言うと淡島はさっさと2－Dの教室に消えていった

～昼休み～

『ゲン、一緒に飯食わないか？話がある』

「・・・・わかった」

2人は屋上に上がり、近くのベンチに座る

「で？話ってのはなんだ？」

『・・・・ゴロからキャプテンにならないかと言われた』

「淡島が？」

影人の言葉にゲンは箸を置く

『あぁ、自分はピッチャーだしお前の方がキャプテンに向いてると言われた』

「ほぅ、確かにそうだ」

『そこでだ・・・・オレがキャプテンになったらゲン、お前を副キャプテンに任命する』

「・・・・・・・・・・・・は？」

驚きのあまりにゲンの思考は少し停止していた

「ちょっと待て、根本的にオレは野球部じゃねぇ」

『だから今から入れ』

「お前、自分が何言ってんのか分かってのか？」

ゲンは苛立ちとイラつきで影人をにらみつける

『前から言ってるだろ、オレは本気だ』

負けじと影人もゲンをにらみ返す

「オレは野球部には入らねぇ、それは前から言ってるはずだ」

『知っている・・・だがオレはお前と野球を真剣(マジ)でしてぇ』

「話にならねぇ」

そう吐き捨てるとゲンは弁当を閉じて出口へと向かう

『逃げるのか？』

「逃げてねぇよ！」

『いいや、ゲン、お前は野球から逃げている！オレは宇佐美さんから聞いているぞ！お前が野球から離れた“もう一つの理由”を！』

「・・・・・」

ゲンは足を止めて影人の方を向く

「だから何だ？オレの人生に口出す権利はお前にねぇ！」

『・・・・確かにそうだ』

「わかってんだったら・・・・」

バチン！

ゲンの言葉は投げ捨てられるワッペンの音で掻き消された

『勝負せぇ、３打席勝負や。オレがピッチャーでお前が打つんや、一本でもヒット打てたらオレはお前にもう野球部に入れなんて言わへん・・・・お前が負けたら野球部に入れ』

「舐めてんのか？」

『怖いならしなくてええぇ』

「ちっ！やってやるよ」

ゲンもワッペンを投げて重ね≪決闘≫が決まった

十七球目（後書き）

すみません、久しぶりの更新です
いろいろあって書けませんでしたがようやく続きを書くことができました。
これからは最低週1、2回は更新したいと思ってます
なんとかSが出るまでに簡潔させたいです

十八球目

「おい！源が決闘だってよ！」

「しかも相手は転校生の黒姫影人だって！」

「黒姫ってあの甲子園で活躍した！？」

「野球対決だよ！あの源が決闘に参戦！！３打席勝負で源が人気！」

様々な情報などが飛び交い昼休みの川神学園はさらに騒がしさを増していた

「源と影人が・・・」

「英雄様、勝負は十分後にグランドで行われるようです」

「・・・・あずみすぐに場所を確保せよ」

～グランド～

「いきなりキャッチャーせぇて呼ばれたから何事かと思えば、一体何を考えとるんじゃ？」

呆れたように淡島が影人にボールを投げ返す

『何も・・・あいつがいないと来年に甲子園は難しいって思っただけだよ』

フォームをチェックしながら座っている淡島にボールを投げ込みながら素振りをしているゲンに視線を向ける

『・・・・・』

「まぁ、細かいことはきかんが勝てるんか？」

『ちょっとだけピッチャーやったことあるんだよ』

そう言うと影人は投球のスピードを上げ始めた

「各自名乗りを上げぇい！」

「っち、２－Ｆ源　忠勝」

『２－Ｆ黒姫　影人』

「勝負は３打席勝負の野球対決、源はヒットを打てば勝ち、黒姫は３打席抑えれば勝ち、四死球はノーカウントでカウントなしからリスタートじゃ、主審はワシ、塁審はルー先生と宇佐美先生、小島先生で務め、ヒットの判定も審判で行う。守備は野球部及びボランティアじゃ、よいな？」

川神鉄心がルールの確認を行い、それに２人が頷く

「では、位置に付くのじゃ」

影人はピッチャーマウンドへ、ゲンは右のバッターボックスに入る

「準備はよいな・・・プレイボール！」

「「「「「わああああああああああああああ」」」」」

いつの間にか増えに増えた観客の元、決闘の火ぶたが切って落とされた

『・・・観客多いな』

ロージンを手に付けながら影人がポツリと呟く

「かっちゃーん！頑張れー！」

「ゲンさーん！」

「きゃぁぁぁ！源くーん！」

『・・・・ゲンの奴人気だな』

聞こえる歓声に影人が少し寂しさを覚えた

「黒姫せんぱーい！」

『・・・・大和田さんが女神に見える』

少し盛り返した

『・・・いくか』

ｓｉｄｅ忠勝

投球練習を見た限りではストレートは１３０ｋｍ／ｈぐらいで変化球は投げていなかった、印象ではこの間の隼高校のピッチャーの方がいい球を投げていた印象だ

「プレイボール！」

学園長のコールが響きクロはロージンを手に付けながら集中しているようだ、球種もわからない上でいきなり勝負だとくると一打席目は様子見が得策だな

「源」

「勝負の最中に話しかけるな」

「そう言いながら答える辺りお主は甘いんじゃ、初球から行かな負けるぞ？」

淡島がまるでオレの心を呼んだかのように言うがオレは何も言わずにクロの投球に集中する

ｓｉｄｅｏｕｔ

ビシッ！

バン！

「ストライーク！」

初球はインコース高めのストレート、際どいボールだが判定はストライクだった

「（コントロールは流石だな）」

ゲンはゆったりと構え直しながら少し感心する

『・・・・』

二球目、影人はさきほどの大きいフォームとは違いクイックで投げ込む

キン！

「ファール！」

アウトコースのボールはゲンのバットに当たるものの一塁側へファールになる

「（少し遅れたな）」

意表を突いた球だったがコンパクトでミート力のあるゲンにはあまり意味を成さなかった

『・・・・・』

三球目、次は大きく振りかぶって大きいモーションで影人が投げ込む

キン！

バシ！

１４０ｋｍ／ｈを超える真中高めのストレートだったがゲンは完全にとらえて弾き返したが球はピッチャー正面のライナーになってしまう

「アウト！」

鉄心のコールでゲンの残り打席は２打席になる

「惜しかったな」

「うるせぇ、黙ってろ」

淡島の言葉を冷たくゲンは返すが自身でも勝利を少し確信していた

『・・・・・』

影人はポーカーフェイスを決めたままでロージンを手につけていた

「なぁ、源」

「・・・・・・」

淡島の呼びかけにゲンは無視を決め込む

「・・・この勝負、ワシは影人の勝ちに1万円掛けたる。お前が野球部に入る保険金じゃ」

「はぁ？」

急な話に流石にゲンも驚いた顔で淡島を見る

「クロがさっき言うてたんじゃ、第一打席を打ちとればあとは自分の勝ちやと」

「・・・・・」

「ワシもこの決闘に非公式参入じゃ、ワシが勝ったら確実に野球部に入ってもらうからの。だから一万円は保険じゃ」

「・・・・勝手しろ」

ゲンは淡島の言うことが自分を精神的に攻めるためだと考えた

だが、その考えが間違いだったと気付いたのは勝負が終わってからだった

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0187x/

真剣でオレと野球しよう

2011年12月1日01時46分発行